

---

# LIE

優真

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

LIE

### 【Nコード】

N8459L

### 【作者名】

優真

### 【あらすじ】

作者の完全BLオリジナルシリアス多め小説です（・・・）

## B l u e   e y e s

だつて最初は

ほんの小さなそれを

暖かなそれを…

ただそれだけが欲しかった  
誰だつてそうでしょう？

なのに！！現実には音をたて  
無惨に砕け散る…

鏡の様に…

狂気の果てに見えたものは  
鏡に映る自分に似た誰か

鏡の自分の目に映るのは…  
誰よりも愛しかったハズの  
貴方の笑顔。

それは…  
後に音をたてて砕け散る。

流れたこの血は  
罰か、憂いか…

愛、なのか…

貴方は信じてくれる？

「本当、に？…」

あの時、その問いかけに  
簡単に答えたあの日

「ああ、約束しようね…」

後の俺達を想像していたなら…

「本当？嬉しいっ！嬉しい…」

いや、答えるのは  
簡単だったんだよ？

>>僕達、ずっと一緒？<<

ほら、

「ん？ああそうだよ」

とっても簡単でしょ…

## 小さな青い屋根の本屋

あらあら珍しい…

こんな小さな本屋に

ようこそお出でなされた

私はこの店の店長の

谷>たにくと申します

私共はお客様に見合った作品を「お読み」致すのがお仕事でございます…

なあにお金は心配いりませんとも、これは私共の趣味でございます  
て…くつくつく…

おやおや…そんなに睨まないで下さいな…可愛い顔が台無しです  
よ…あら、貴方様は綺麗な瞳をお持ちだこと。

では一つ、貴方様の様な海のように綺麗な青い瞳の少年のお話を致しますしょうか…

## 青い海辺

波が足元に寄せては返し、

何度も押し寄せて来る波は

俺に対して罪を押し付けるような感じがして苦手になった。つい、この間…

クラクションと共に両親が窓から顔を出し、そろそろ良いかと尋ねてきた。

そう、俺…刹那　一樹>セツナ　イツキ<は  
今日この街を…

思い出も、ここから出る事を許され無いあの子を置いて出て行きます。

「これだけは許して欲しい…」

小さな墓石を優しく撫でる。

かつてあの子にしてあげた様に…

「俺はここを出て行くよ」

なあ、あき…

今日が本当にさよならの日だ…

第壱話 - さよならの秋 -

(夢の中で、誰かが呼ぶ)



## 青い記憶に埋もれ - 1 -

「ねっ、一樹君…」

病室のベッドで小さな身体が起き上がり名前を呼ぶ。その声は何とも弱々しく、今にも消えてしまいそうだ。

「どうした…」

とても同じ年とは思え無い程の小柄な身体と弱々しい咳。透き通った青い瞳は常に水分で潤んでいた。

「今日は学校何したの？」

「…そうだな、…晶>アキラ<の好きなスケッチとかかな…」

他愛無い話。普通ならばあきは生まれつき身体が悪く、中学校までは一緒に通っていたが今ではそれが叶わなくなった。

そして忘れていけないのは俺と晶は付き合っていること。  
あ、これ内緒な？  
バレるとうるさいだろう

「…スケッチ…」

「病気が良くなったら二人で海に言ってスケッチしよう…」

「本当につ？」

「ああ、」

約束だよ。

青い記憶に埋もれ - 2 -

本当は知っていた。

晶の病気は治つたりしない…  
だからここから一生出れない

そして…

晶はあとの位生きられるのかも解らない。

…

「スケッチ、スケッチ…」

あれから数日、瞳を輝かせながら絶対に来ない日を待ち望んでいる  
晶が痛々しくて、俺はついに本当の事を話してしまった。

晶は理解出来ないのか未だ首を傾げたままで…

「だから晶、もう外では…「何で」

何で僕だけいけないの？

当たり前の問いかけが返ってくる。

「外に出ると病気が余計に悪くなるんだよ…だから我慢しような」

刹那、

晶の表情は失望へと変わった。

「やだやだやだっ！！」

ここから出たい、出たいと狂おしい程に叫ぶ晶。こんな知らない、見たことない。

しかし何故だかそれが癪に触り感情のままに晶を叱りつける。  
仕方ないだろ、と  
そんなに行きたきゃ勝手に行け…

病院を飛び出した俺には晶の表情は解らなかったが何故だか酷く寂  
しげな泣き声が聞こえてきた気がした。

約束、だったのに…と

青い記憶に埋もれ - 3 -

(晶視点)

- 行きたいなら勝手に行けばいい -

彼の辛辣な言葉に  
胸が締め付けられる。

「…本当に、行っちゃうよ?」

「行けば良いじゃない」

凜とした声が響く  
誰だかは解らないけど

凄く綺麗な女性だった

「彼の学校、明日は美術で海を描きに来るんですってよ…貴方に好都合じゃないの」

一緒に描けるじゃない

その言葉がやけに  
心に残る

そうだ

僕が行けば、行って待っていれば良いのだった。

お礼を言う前に女性は  
消えていた。

「お礼、言いたかったのにな…」

翌日

準備は完璧

何もかも持つて僕は病室を脱け出した、今では懐かしい小道を歩いていると捨てられた猫に出会う。

にやあ

「一緒に、行く？」

にや

柔らかそうな白い毛並みの猫を鞆に入れてやり僕は再び歩きだす。そう言えば昨日の女の人も綺麗な白銀の髪だったな…なんて

しかしまあキツイ  
キツ過ぎる、暑いよ…

ここで待っていれば  
一樹君は来るのかな…  
ビックリするだろうか

「楽しみ…」

ビックリしないよね  
だって、

約束…したもんね？



「美術の授業は中止にします。」

「え？何でー」

教室内からのブーイングが響く。それもそのはず、今日は海でスケッチのハズだったのに…

晶に見せられないな…  
でも何故だろう

「何でですかあ？」

クラスの女子からの質問に全員が顔を見合せ先生に答えを言わせようと必死だ

「実はね…午後から夜にかけて酷い雨になるそうなの…気温も下がるし海ではかなり危険よね？」

まあ、そうだな

## 青空に描く夢 - 1 -

「遅いなあ…一樹君、来ない…」

白い紙に広がる青い海に  
人影が二人。一樹君と僕  
今は一人だけだね、悪い？

にゃおん

「僕の夢なんだよ…」  
不思議そうにスケッチを覗き込む小さな友達に告げる夢。まだ誰も  
知らない夢

「いつかね…病気が治ったら、またここで沢山スケッチするんだよ」

ポタリ、ポタリ…

頬に冷たいものが当たる

「あ…」

ポタリ、ポタリ…ザー…

「やつ、やだ雨!？」

スケッチと猫さんを鞆に入れ取り敢えず岩陰に（と言っても隠れる場所が無いから仕方なく）隠れる。

少しは濡れるよ

そりゃあ岩陰だもん！

「ふわ…寒い」

さっきまでの天気は  
何だったんだろうか…

…

「はあ、はあ…はあっ…」

寒い。寒い寒い…

僕は今、絶望的な状況にある

「寒い…でも帰れないよ…」

身体に力が…入らない

嘘でしょ、ねえ…

こんな時につて…

相当ヤバくないですか？

- 刹那宅 -

シリシリ

先ほどから電話が鳴り響いていて、珍しく両親が深刻そうに話合っている

何かあったのかな…

「おい母さ…」「晶君が病院を脱け出したらしいの、一樹知らない！？」

え…？  
晶…が…？

「ま、待てよ！どという事だよ！」

「お父さん達探しに行って来るから一樹は待ってなさい！晶君がもしうちに来たらその時は宜しくね？」

そうして両親は出て行くが、結局夜中になっても晶は見つからなかった。それで捜索は明日に持ち越される。

この酷い雨だ、もし外に出ていたのなら晶が一人で帰れる訳が無い。きっと何処かで雨宿りだな…

ずっと一緒？

「…晶…」

ごめんな、

今は寂しいだろうけど明日は必ず俺が側に居てやるからな、そして謝らなければ今日の事を…

治らないなんて言うてごめんな…勝手に行けばなんて嘘なんだよっ

てな…

「晶…頼むから無事で…」

ただそれだけを祈って  
瞳を閉じる。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8459/>

---

LIE

2010年10月10日02時03分発行